



10 偶感集 上卷

A 偶感集 (1932年—1945年)

B 偶感集 (1946年—1948年)

筑摩書房

渡辺一夫著作集 10



筑摩書房

渡辺一夫著作集10 偶感集 上巻

一九七〇年七月十日 初版第一刷発行
一九七七年一月三十日 増補版第三刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一七六五一

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京六一四二二三

印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

©渡辺芳枝一九七六

偶感集 上巻 目次

端 書 3

A 偶感集（一九三二年—一九四五年）

a 折にふれて

バリ書生日記抄 10

滞仏雑記（一九三二—一九三三）——ミスタ・チャンの話—— 18

カルチエ・ラタン風景（一九三二—一九三三） 26

Edouard Championのこと 30

浦島次郎物語 41

ペルト・ボヴィ Berthe Boy のこと 47

HOME SUM 51

セーヌ河畔の古本屋 53

セーヌ河畔の古本盗人 60

ブーラール氏の蔵書と「架空文庫」 65

サンキユー・ヴェリ・マツチ 70

望蜀記 よくばりばなし	75
買書地獄	81
近衛直麿君とお末 すえ	85
書籍について	91
変な話	97
僕の友だち	100
砂丘での対話——monologue “hivresque”——	106
月三題	114
月に吠える狼	119
びいどろ学士——戎衣の若き友に——	122
夢二夜	126
素月を信ずる心	131
b あの頃のこと	
文化紹介について	136
高校生徒A君に	141
葦芽の歌 あしかび	145
オストラキスセス	
貝殻投票について	150

敗れる前のフランスに 153

敗れたフランスに 166

生臭談義 176

試験極楽 183

時局と学生 188

文学者について 197

温故知新 201

羈旅 210

B 偶感集（一九四六年—一九四八年）

a 折にふれて

六隅許六終焉の記など 222

吉満さん 226

総領甚六の弁 230

娘が見た夢 239

過激で愚劣な夢 246

東条元首相の写真 251

「普通教育」の普及の悪なる場合について	259
科学に志す若き友へ	261
号令について	265
懷疑主義について	268
顔・加保・垢について	272
映画落第生	278
書痴愚痴	282
一九四六年の跋	285
忘れ得ぬ女性 ひと の言葉	291
俳諧について	302
非力について	309
本能について	312
悲願小器晩成	315
銀杏によせて	318
『凱旋門』読後	321
シニスムについて	327
下品恨 げほんこん	338

思想の役目について	345
カトリシズムと僕	348
小説が書けないことについて	360
二人の老人について	367
ある壮年実業家について	370
パリの古本屋の思い出	373
便秘と下水	379
流水三題訓話	383
T先生とハモニカ	387
狂気について	389
不幸について	393
進歩について	401
出隆先生のこと	404
ある上奏文について	408
古レコードを聞きながら	411
装幀と僕	418
音楽と僕	422

偽日記抄 一（一九四八年） 427

b あのこと

個性の懐胎について 432

啓蟄独語 438

幼稚な質問 448

愛されない能力 Unbeliebtheit 452

祈願 456

第二の開国 460

「世界観」以前のこと 466

「国語問題」以前のこと 480

読書懺悔 487

憲兵熱について 497

文法学者も戦争を呪詛し得ることについて 503

人間が機械になることは避けられないものであろうか？ 515

偶感集

上卷

端書

この『偶感集』上巻には、太平洋戦争前一九三二年頃から、敗戦後の一九四八年までの間に綴られた雑文が収められている。

どれを取ってみても、幼稚或は偏頗へんぱな文章であり、よく臆面もなく斯様なものを書き綴り、今ここに、またよく臆面もなく新版に再録したものだと言者に咎められるに違いないし、それは覚悟している。ただ私が用意している申しわけとしては、あのふしぎな、あの悪夢のような時期が、日本にも確かにあったのだということが何らかの形で伝えられればと思って、敢て臆面もないことをしただけと言うより外にいたし方ない。

一九四七年に、畏友高橋義孝氏は、次のように書いて居られた。（本巻には収録していない私の雑文中に引用したものの再録である。）

「僕は、この約十年間、特に敗戦後周囲の人と動きとをほとんど憎悪してきたのだが、道義心はいわずもがな、臭気、色彩、味わいの一段とすさまじくなりまさる今日この頃では不思議にも憎悪が愛情に転じた。もし僕が未だなお不快に思っているものがあるとすれば、それは誇大妄想に陥った批評家の存在である。

その一つは、貴族的なシニズムに拠って野蠻にして醜悪なる吾がはらからを批判し叱咤し擲擻し啓蒙し罵倒し

軽侮する三百代言共だ。彼等は古往今來の飛び切り上等の芸術家や思想家の代言人となつて、みじめな日本の現実に上に君臨する。それだけならまだしも、いわばあたかも自分だけは野蠻にして醜惡なるこの現実とは無関係であるかのように振舞う。自分のからだだけはよごすまいとして、日本の泥濘の中を爪立って歩いて行く。実は引用語辞典の金棒曳きなのだ。そして自分の黄面短軀と世界における日本の客觀的位置とをもの見事に忘却する。すなわち彼等は日本の野蠻と醜惡とを喰いものにして生きているのである。僕は孔雀の羽根をつけた鳥共を憎惡し、むしろ闇屋さんの類人猿に古怪な相貌を愛惜してやまない。

その二は、思想や問題の料理人諸君だ。

食べられそうなものならまずなんでも彼等の手に委ねてみるがいい。彼等は馬糞から餛飩うどんを作りだすだろう。しかもこの餛飩は依然たる馬糞なのだ。一切は彼等の庖丁一つで見ちがえるようになって食卓に供せられる。そして彼等自身は『くわせもの』を拵えておきながら高級な料理を作ったと信じ込んでいるのである。が彼等は残念ながら、というより無責任にも栄養學に通じていない。」

高橋氏は特に私だけのことを咎めて居られたわけではなからうが、当時の私としては、省れば省るほど臍に傷ある身というような氣持になり大変恐縮してしまった。全く高橋氏の書かれた通りのことをしてしまつたらしいが、本巻の読者も同感であらうと思う。ただ乞ひ願くば、私のような者までが、臍面もなく、このようなことをしてしまつた時期があつたということが、現在の読者に伝わつてほしい。私は、何の弁解もできない。

戦前戦中戦後に青壮年時代を送られた方には、私の臍面なさも、それはそれなりにお判り下さるであらう。しかし、戦後に生れた人々には、恐らく、何も通じないかもしれないし、下手なお伽噺かであらうかしと思われな

であるし、二度とないほうがよいからである。

全体を、**A**（一九三二年―一九四五年・敗戦の年）と**B**（一九四六年―一九四八年）とに分け、更に、その各々を、**a**「折にふれて」と**b**「あの頃のこと」との二つの群に分けた。前者には、所謂隨筆風なもの身辺雜記風なものを、後者には、若干時局的な妄言的雜文を収めた。**a b**とも各々、原則として、執筆年代順になっている。

本巻は、孔子が「三十にして立つ」とした年齢から同じく孔子が「四十にして惑わず」とした年齢にいたるまでの私の告白的記録である。私は、三十にして立てなかったし、四十にして、ただ惑っていたにすぎないことがよく判った。

旧稿に見られたあまり慎みのない表現やあまりうるさすぎる繰言は、若干訂正削除した。

一九七〇年一月

渡辺 一夫 識

A

偶感集（一九三二年—一九四五年）

